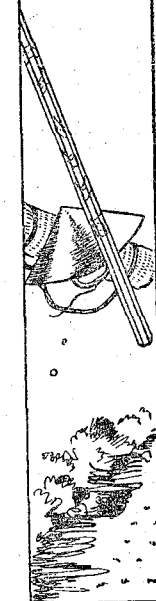


# 史料



## 歴史的に見た高知縣の道路(一)

瀧口利太郎

南海の僻陬、高知縣の交通機關が、今日の如く發展したのは勿論偶然のことではない、素より天災地變の自然的現象

や興亡盛衰の歴史と共に展開されて來たものであらうが、

我が高知縣の道路發達の過程は特に戰國時代より徳川時代にかけての歴史に緊密な交渉を持つて居るといふことを見逃してはならない。即ち本篇が高知縣道路の推移を歴史的に展望した所以である。尙本稿の資料は元高知縣道路技手であり且つ縣下道路愛護運動の生みの親ともいふべき丸山

新藏氏より提供せられたものであることを茲にお断りすると同時に、同氏に對して深甚の謝意を表する次第である。

### 千年前に於ける土佐の交通状態

小倉百人一首の名吟「人はいざ心もしらず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける」の作者紀貫之が君命を奉じて土佐の國守となり、花の都を後に遙々とわが土佐の地に赴任せられたのは醍醐天皇の延長八年正月のことであり、實に今より一千年の昔であつた。

其の頃の土佐の交通状態は全く原始的であり。村から里へ、里から海邊への往來も極めて狭苦しい一筋の道によるの外はなかつたのである。又海邊や河沼の交通には舟を唯一の利器として居たのであつたことは、貫之が朱雀天皇の承平四年十二月二十一日、國司としての任滿ちて國府の館を出發し、思出多き歸洛のみちすがらその舟路の無聊に任せて書きしるした。かの有名な土佐日記を通じて十分に之を窺ふことが出來るのである。

### 戰國時代の土佐

其の後光陰は匆々として流れ、紀氏が此の地を去つて既に數百年、世は彼の戰國時代となつた。時の傑將として名高い長會我部宮内少輔元親は永祿三年の五月歲僅かに十八にして初めて長濱合戦に出陣したのである。

夫れより彼が獨特の智謀と手腕とは遺憾なく發揮せられ、亡父國親の遺言に任せ四國の各地に轉戦し拔山蓋世の勇を奮ひ激戦百數十回に及び、天正十二年天晴四國平定の大業を完成し赫々たる武功を天下に示したのである。

### 元親の軍用道路開鑿

元親の戰略には實に非凡なるものが多くあつたと傳へられて居るが、其の最も敵を惱ませたのは敵陣を正面より攻むるが如くに装ひ不意に背後より襲撃する事の秘術に依ることであつた。これが彼れの常に必勝を期する戦法であつたが、これには亦多額の軍費を投じ、幾多の犠牲を拂つて敵陣背後の峻嶮極まりなき山地に至るまで悉く軍兵の通路を築造して自由なる行軍と兵糧運搬の用に供したのであつた。それが戦後直ちに村人の通行する道路となり各地を連絡する道路となつて一般に便益を與へた。斯の如くにして四國連絡の主要なる道路は概ね長會我部氏が四國征伐當時の開鑿に成つたものであり、四百年後の今日に至るも尙ほ之が恩恵に浴せるもの數限りなく、殊に土豫の國境を奥深く分け入れば當時の廣大なる遺跡は歴然として眞に驚歎に値するものがある。

翌天正十三年元親は遂に大閤秀吉公に降つたが同十六年一旦土佐に歸國して岡豊の居城を大高坂(高知市)に移し、

城の東西南北には水防の爲め堤を築き南方の河には湖江山麓に至るまで二百餘間の大橋を架け、其の他四方に渡船を置き大いに往來の便を開いたのである。當時二百餘間の大橋を架渡したといふことは其の構造の優劣は別として如何に大專業であつたかは想像に餘りがある。恐らく之れが四國全土に於ける開闢以來の橋梁であつたと思はれる。特にこの四國軍記にもはつきりと記されて居るさうである。

大高坂城は四圍河に面し要害の堅固なること他に比類が無かつたが、治水の業が容易でなつた爲め早くも其の翌年に至り洪水の厄に會ひ堤防は崩壊し橋梁町屋等悉く押し流され僅か二年ばかりにして天正十九年浦戸城に移り、正月二十八日上下千秋萬歳を祝ふ折しも港の内に鯨が入つて來たので元親氏はあまたの漁師をして之れを捕獲せしめ、船數十艘を仕立て其の日の夕方浦戸を出で、百餘里の海を漕ぎ、翌二十九日の眞夜中に攝洲大阪の川口に着いた。三十日晝を待つて人夫七百人をして物々しく九尋に餘る大鯨を大阪城内に曳ぎ入れ、之を秀吉公に献上した。秀吉公の

喜びは一方でなく——此の地に於て丸鯨を見しは前代未聞のことなり——とて其の印象は深く腦裡に止められ、御朱印に倭子八百石を漁師達に遺はされた。丸鯨を關白に献上するといふ様なことは到底常人の爲し得る所でない。實に南國特異の男性的氣分を遺憾なく發揮して居ると思ふ。

其の後元親は益々秀吉公の信任厚く、豊後戸次川の戦では武將として島津義久と戦ひ、又朝鮮征伐のときは加藤清正等と共に渡鮮すること前後二回、天成無盡の大精力を發揮して數度の軍功により、慶長四年の春正四位少將土佐守に任ぜられた。武勳赫々たる名將として其の偉大なる地位は永く史上に印せられた。同年五月十九日六十一歳を一期として伏見の邸に卒去せられたのである。

#### 山内一豊時代

元親の嗣子盛親は父の遺志を繼ぎ土佐守として國政に盡したが慶長四年九月偶々彼の關ヶ原の役起るや、石田三成に組せしを以て盛親の所領は徳川家康の沒收する所となり、翌慶長五年家康は之を遠州掛川の領主山内對島守一豊

に與へた。盛親は祖先累代の所領を失ひ元和元年五月十五日四條河原に戰死し、茲に長曾我部氏は亡滅の悲運に陥つたのである。

是れより山内一豊氏は慶長五年十二月末攝州大阪を出帆して淡州由良に寄港し、こゝで新玉の年を迎へ翌慶長六年正月二日土佐の甲浦に到着し曩に長曾部氏の開鑿に成れる野根山街道を奈半利に出で、陸路をとりて同月八日長濱を経て浦戸城に入つたのである。茲に山内氏は土佐百里の地を領有することになつたが此の城は規模狹隘なりしたため不便が多かつたので、同年八月之れを高坂（現在の高知城）に移さんとし、家臣百々越前安行に命じて繩張町割をなさしめ工事に取つかつたのである。周圍の河邊には堅固なる堤防を築いて水防に備へ、城の八方には縦横の道路を開鑿し區域を定めて家屋の建築を許したので先を争つて住民入り來り建築するもの續出し、短日月の間に町勢大いに進

展し寂寥たる沮洳の寒村より繁華殷盛の市街を成し現在の大高知市の基を作つたのである。

夫より慶長八年には本丸、二ノ丸の石垣橋の廊下や太鼓櫓天守閣等の工事も竣功を告げ、同年八月二十一日花々しく入城せられ此處を永久の居城と定められた。茲に於て着々として政治經濟の統制を計り、進んで立藩及民治の策を樹立したので戰國亂離の民人は綏撫せられ、百里の山澤を徐に開拓せられて美産豐殖の地となつたのである。斯くし庶民の生活を助け教育の途をひらき藩政初期の創業を完成せられたが、慶長十年九月二十日京都に於て急症により六十一歳を以て薨去せられた。

### 二代忠義の時代

一豊公の没後養子忠義二代藩主として其の家督を繼ぎ五十有餘年の久しきに及んだ。忠義勇武絶倫にして三百諸侯中に在りても異彩を放ち、豪放にして然も細心の人であつた。その頃長曾我部氏の遺臣にして主家斷絶のため落魄寄る所なき者多きを憐れみ、時の奉行職野中兼山良繼に命じて此等のものに國中の新田開發をなさしむることとし、之を以て食邑に充て郷土となして格式御留居組に准せしめ先

づ其の遺臣一百人を選抜して香美郡野市村を開墾せしめ是より後慶安、承應、明曆、萬治、寛文の間續々と四方の浪人を募り、之れと同時に河道を開墾して田水灌漑の便利を開き以て其の拓地の功を助くるの急務を察し正保元年野市村に井溝を開堀し、物部川本流には水閘を設け更に西分井筋を開墾し、後十一年を経て明暦元年野市上井筋の開墾を成就した。同三年中井筋を開墾し前後十五ヶ年を経て本流の井堰と共に其の工が完了した。野市六千石の良田は即ち之れである。

又正保二年には香美郡山田上井筋の開墾をなし舟棹の便に供し、本流には二重の堰を設け水量の増大を計つた。之れ、即ち山田堰にして山田三千石堰下三萬石の良田是れである。以上の工事を完成せしむるには實に二十有餘年の歳月を費し、疏水延長十一里給水耕田二千三百餘町歩にして亦山田、野市上下三堰を築くに當り松材十一萬五千餘本石材三千六百九十坪を使用したるに徴するも其の規模の如何に大なるかを想像することが出来る。而して又この堰が三

百年後の今日に至るも毫も舊態を改めざるは、其の結構の如何に堅牢なるかを物語つて居るものと云へよう。

兼山は亦慶安元年より承應元年に至る五ヶ年を費して仁淀川の水引き、吾川高岡の二郡に跨がる原野に溉がんと欲して吾川郡の八田村に堰を設け、弘岡、諸木の二郷を経て浦戸港（現高知港）内に注ぐ長濱川の開墾をなし弘岡五千石の良田又是れより起り、其の外鎌田堰及井筋の工事は萬治二年に完成せるもので兼山が一代の功績中其の最も大なるは此の三堰の經營にありと言はれて居る。

#### 兼山の高低測量法と道路開墾

當時兼山は井溝開墾に當り其の高低測量は専ら夜間之れを行ひ、提灯を竿に縛し一町毎に之れを立て、一直線に看通して其の低きは上げ高きは下げて平均を得て後已み翌朝提灯の下なる竿の高さを算し之れを築埋せりといふ、斯くの如くにして此の廣大なる荒野は悉く開拓せられ、之れに伴ひ小中道路の開墾せるもの實に百五十有餘里に達し、長曾我部氏以來この中央地域に道路の開墾せられたのは實に

此の時代であつて、現在の縦横網の如き道路は大半その當時に築造せられたものである。

又國の東端室戸岬の近海は潮流風濤險惡にして舟行の危険少なからず、屢々築港を企つるも未だ成らざりしが兼山はその不可能ならざるを考へ。寛文元年一木權兵衛、井上忠右衛門等を擧用し、安藝郡津呂、室津の兩港及び香美郡手結港の工事を起し畢生の力をふるひ明暦元年之れを完成せしめた、津呂港は港口南に向ひ東西九十間南北三十六間深さ千潮時三尺満潮九尺、室津港は港口西南に向ひ東西百三十七間南北四十二間深さ千潮四尺満潮時十尺に達す、手結港は港口西に向ひ東西四十間南北八十間深さ千潮十尺満潮十六尺である。又幡多郡柏島は一小孤島にして風浪毎に砂土を流ひ住民堵に安んずること能はざりしを兼山此處に堤防を築いて流砂を防ぎ、其の半面には二丁餘の突堤を海中に構築して潮流を緩和し、灣内に魚類の群集を計り永く漁獵に利し其他國中に命じて漆、桑、楮、茶等を栽植せしめ農民の子女に定業を課し儉勤の風を興す等其の政策は着

々實效を奏した。德澤の百世に不朽なるは世の普く知る所である。

斯くして二十有七年新政の成績斐然皆知るべかりしが寛文三年他の國老と諧はざることあり、爲めに時勢の失を訴ふるに至り七月二十九日自ら請ふて職を辭し、香美郡中野に退隱し十二月十五日四十九歳にして病歿せられた。明治四十五年正四位を追贈せられ現在高知市の近郊五臺山に縣社(春野神社)として祀られてゐるが、最近この高知縣民の大恩人として永久に仰ふぐべき偉人を祀る神社は須く市内に移すべしとの議出で、適當の地を物色中である。

#### 忠義公の遺業

忠義は絶大なる經綸を抱き、兼山を起用して國內の土木治水事業を完成せしめ殖産興業の發展を圖り、無秩序であつた戰國時代以來の制度を整理し政治經濟に一大機軸を作り上げたのであるが寛文四年の冬卒去せられた。おもふに土佐藩の創業は忠義公に負へるものと言ふべきである。

#### 忠義以後明治中期まで

十五代豊信公は即ち容堂公にして彼の幕末維新の大風雲に際會するや、徳川慶喜をして大政を奉還せしめ王政復古の大業を奏せられ當時三百諸侯の第一人者と唱はれた方である。

十六代豊範公は維新の際に封土を奉還せられ、藩知事として暫らく土佐の舊領土を治められたが明治四年廢藩置縣に至り知事を免ぜられ華族侯爵に列せられた。斯くして廢藩の結果土佐國は高知縣と改められ同四年十一月十五日の林包直氏高知縣參事に任命、同五年十一月二十七日岩崎長武氏權令任命、同九年八月二十六日小池國武氏權令任命、同十二年六月七日北垣國道氏縣令任命、同十四年一月十九日田邊輝實氏縣令任命、同十五年十一月六日伊集院兼喜氏縣令として着任せられたが當時縣下の交通網發達は全く閉塞の状態にあり、維新以後一般交通の開けると共に其の不便苦痛は一方でなかつた。

(未完)

◎春夏漫吟

田中野狐禪

藤に來る蜂を怖れつ池の茶屋  
藤白し松の木の間明るさに  
懸崖に藤の大房揺れやまず  
藤の色たゞへて池亭晴れてあり  
寫眞師のうるさくまるとる藤の茶屋  
温泉ほとりを寢惜む心春夜なる  
春宵やケースの中の小人形  
肩すべる羽織も酔や宵の春  
春の夜や酒毒の吾れを思ひ佗び  
かぐはしき春宵の顔灯の鏡  
飯蛸や海松藻隠れの月の下  
飯蛸の生姜も馬鹿な甘煮かな  
温泉の宿の黄昏の色若葉雨  
柿若葉灘の酒藏晴れにけり  
青嵐日さしの奥の射塚かな  
青嵐噴井に鯉を料りけり  
青葉風や水を離れて松の鶯

ある人の送別に

君を待つ満洲の花美しき